

山本和平名誉教授著作目録

論文

- Jonathan Swift —その狂気について (学士論文) '56年
Fielding and Some Aspects of Modern Novels (修士論文) '59年
Tom Jones の一面 (『金沢大学法文学部論集 文学篇』No. 7) '59年
十八世紀小説とリアリズム (*Kanazawa English Studies* No. 6) '60年
Goldsmith の思想と方法—*The Deserted Village* (『金沢大学法文学部論集
文学編』No. 9) '62年
Goldsmith の思想と方法—*The Vicar of Wakefield* (*Critica* No. 5) '62年
The Vicar of Wakefield—An Interpretation (*Hitotsubashi Journal of Arts
& Sciences*) '64年
Middlemarch 序論 (『一橋大学人文科学研究』No. 6) '64年
Middlemarch 小論—ガースの倫理について (『言語文化』No. 1) '64年
I. A. Richards その他 (『一橋論叢』Vol. 53, No. 4) '65年4月
「二つの文化」論争 (『一橋論叢』Vol. 56, No. 1) '66年7月
金子光晴私論 (『一橋論叢』Vol. 57, No. 2) '67年2月
椰子の実——詩と科学 (『一橋論叢』Vol. 61, No. 2) '69年2月
Thomas Hardy の短編小説 (『20世紀英米文学案内——ハーディ』所収) '69年3月
スウィフトと逆ユートピア (『海』昭和45年8月号) '70年
『廃村』考補遺 (『言語文化』No. 11) '74年
ホロコーストと文学的想像力 (『一橋論叢』Vol. 83, No. 2) '80年
『疫病年記』おぼえがき (『一橋論叢』Vol. 88, No. 6) '82年
翻訳と解釈——『ロビンソン・クルソー』の場合 (一橋大学社会科学古典資料
センター年報 No. 6) '86年

評論

- 中原中也論 (『創造』No. 1) '57年
金子光晴論 (『創造』No. 3) '58年

書評

- 吉本隆明『抒情の論理』(『文学』Vol. 27, No. 12) '59年

- 内多毅『ジョナサン・ワイルドにおける風刺の研究』(『英文学研究』Vol. 39, No. 2) '63年
- MacDonald Emslie: *Goldsmith—Vicar of Wakefield* (『一橋論叢』Vol. 52, No. 3) '64年
- C. Day Lewis: *The Poet's Way of Knowledge* (『言語文化』No. 2) '65年
- T. S. エリオット「詩の効用と批評の効用」(紹介) (『無限』No. 19) '65年11月
- Raymond Williams: *The Long Revolution* (『一橋論叢』Vol. 55, No. 5) '66年
- マルカム・ラウリー『活火山の下』加納秀夫訳 (『英語青年』Vol. 112, No. 10) '66年
- 中野好夫『スウィフト考』(『英文学研究』Vol. 46, No. 2) '70年
- Raymond Williams: *The Country and the City* (『英文学研究』Vol. 52, Nos. 1—2) '75年
- プリモ・レーヴィ『アウシュヴィッツは終わらない』竹山博英訳
(『朝日ジャーナル』Vol. 22 No. 11) '80年4月
- 山川鴻三『モームの二つの世界』(『英語青年』Vol. 126, No. 5) '80年8月
- Martin Green: *Dream of Adventure, Deeds of Empire* (『言語文化』No. 19) '82年

翻訳

- T. S. エリオット「古典とはなにか」(抄訳) (『日本文学』昭和31年8月号) '56年
- ロレンス・ダレル「T. S. エリオット『荒地』論」(『詩学』Vol. 20, No. 2) '65年2月
- T. S. エリオット「完全な批評家」(『現代イギリス詩論大系』所収) '65年4月
- スウィフト『書物合戦・ドレイピア書簡』(現代思潮社) '68年
- ヴァン・デル・ポスト『狩猟民の心』(山口編『未開と文明』平凡社) '69年
- ガーソン・ケーニン『モームの思い出』(富山房) '70年
- アーノルド・ケトル『イギリス小説序説』(共訳) (研究社) '74年
- ダニエル・デフォー『ロビンソン・クルーソー』(講談社) '78年
- ダニエル・デフォー『ロクサーナ』(集英社) '81年
- R. ウィリアムズ『田舎と都会』(共訳) (晶文社) '85年

対談

- 井伏鱒二『黒い雨』を読む——対話者、一橋大学名誉教授石田忠
(『一橋論叢』Vol. 94, No. 6) '85年



編集後記

所謂「活字離れ」と文化の「サブ・カルチャー」化、さらには学問の「細分化」が指摘され始めて既に久しい。活版活字印刷の施された紙面を前に、孤独な読者が各人の想像力によって独自の世界を創り上げるという行為は、いまや「無形文化財」の範疇に入りつつある。スクリーンやブラウン管の映像は、両耳から忍びこむ妙なる音色と轟音の助けを借りて万人を「講釈師」に変える。何百年も前に地球の裏側に書かれた作家の生原稿は、空輸されたマイクロフィルムによって眼前に現れ、コンピューターのキーは、不老不死の薬を入手してさえなお読了できない資料の存在を教える。学者の生涯は、「ヒカリゴケ」を眺め暮して終るほどのもので、南方熊楠のごとく、雪隠の粘菌の採集にまでは手が回らぬ。何をいまさら「知の全体性」を言い「人と学問」を説き、「詩のありか」を尋ねる必要があるか――。

今年3月に本学を退官され、名誉教授になられた山本和平先生は、早晚私たちを見舞う運命にあった如上の問題を、御自分の学問の出発点とされた方である。1956年の「学士論文」はすでにスウィフトの「狂気」に照準を定めた。『ガリヴァー旅行記』のヤフーの件りを読めば、200年後に非条理の文学を生んだ人間と社会の相が、この作家の脳裡を掠め去ったことが了解できる。その異様な精神の働きが「狂気」であるな

ら、当今の私たちとその時代は現にもう「狂ってしまった」のであるが、ゴールドスマスは、その狂気の端初がイギリスの辺土に浸透する様を見つめた。時は下り、『ミドルマーチ』の作者が、孤島にも似た狭い共同体を描きながら何を回復しようとしていたかを、先生の炯眼は見落すことがなかった。C・P・スノーの「二つの文化」論争は、これもまた当然のごとく先生の眼にとまったが、ヒロシマを知る私たちにあって、それは生ぬるい浮世風呂談義でしかなかった。やがて先生が「ホロコースト」を論じ、あるか無きかの人の想像力にすぎり被爆者体験に近づこうとされる本学名誉教授石田忠先生と『黒い雨』を語らねばならなかった所以である。しかしそういう着眼も、そのみでは文学研究者としては未しいのである。先生の面目は、書き手の姿かたちと心映えが、その所論の随所に文章のすがたとして示されたところにある。なかにも『ロビンソン・クルーソー』の翻訳と巻末の解説は、日本語の由緒正しい伝統に新しい息吹を吹き込んだ稀有な名著である。そこには、私たちが日々棚上げにし、従ってまた何ほどの解決をも見なかった問題に執拗に拘泥し続けた、外国文学研究者の半生の記念碑が立っている。まこと得がたきは、自己を偽ることない真正直な人なのである。

(井上義夫)